令和二年度荒魂之會十一月例會資料

日時　十一月二十八日（土）午後一時から午後三時迄
會場　藤澤驛前茶房
祭禮　東京・小綱神社濁酒祭
出來事　徴兵令の詔書　鹿鳴館開館
人物生誕　　人物忌日　親鸞

十一月の回顧（十三名）

景山　直治氏	昭和五十四年	十一月	二十四日	四十二回忌
安津　泰彦氏	昭和　六十年	十一月	二十八日	三十六回忌
野口　恆樹氏	平成　元年	十一月	七日	三十二回忌
白井　傳　氏	平成　五年	十一月	二十五日	二十八回忌
福田　恆存氏	平成　六年	十一月	二十日	二十七回忌
太田　青丘氏	平成　八年	十一月	十五日	二十五回忌
岩下　保　氏	平成　八年	十一月	二十三日	二十五回忌
平林　孝　氏	平成　十四年	十一月	九日	十九回忌
吉田　良次氏	平成　十五年	十一月	二十日	十八回忌
白井　浩司氏	平成　十六年	十一月	一日	十七回忌
石井　勳氏	平成　十六年	十一月	四日	十七回忌
中津海　茂氏	平成二十二年	十一月	十三日	十一回忌
秋田　勝紀氏	平成二十二年	十一月	二十九日	十一回忌
朝比奈正幸氏	平成二十五年	十一月	二十六日	八回忌
坂本　松江氏	平成二十六年	十一月	二十日	七回忌

内容
研究會　午後一時から午後三時迄
（一）古代歌謠の世界を讀む
『楚辭』　　報告者　竹内
（二）萬葉集輪讀
（三）日本書紀輪讀
（四）江戸武家事典輪讀
（五）偉人暦

二、例會豫定
十二月十九日（土）午後一時から三時　上野驛前茶房
研究課題　『聖詠經（ニコライ譯の聖書・詩篇）』報告者　小澤

ロ、會合催物案内
・三の丸尚藏館展覧會　第八十七回展「名作を傳へる―明治天皇と美術」
會期・後期：十一月十四日（土）～十二月十三日（日）迄
・國立博物館　特別展「桃山―天下人の百年」十月六日（火）～十一月二十九日（日）

楚辭

『楚辭』は支那戰國時代の楚地方に謠はれた辭と呼ばれる形式の韻文、およびそれらを集めた詩集の名前である。全十七卷。その代表作として屈原の『離騷』が擧げられる。支那北方の『詩經』に對して南方を代表する古典文學であり、共に後代の漢詩に流れていく源流の一つとされる。また漢代に全盛を誇る賦の淵源とされ、合わせて辭賦と言はれる。

『楚辞』の特徴として、『詩經』と比べ南方的な風土を背景にして生まれた抒情詩であることが擧げられる。『楚辭』の性格を代表するものとして、哀愁を帶びた、世を憤る傾向の強い、浪漫主義文學であることが擧げられる。

一　離騷・・・苦惱する魂の遍歴の物語
前段では、屈原が自らの家系、出生と、徳性、才能の優れたことを誇る。その後、懐王を助けて理想の政治を行はうとして、讒言を被せられ失脚したことを述べ、汚濁の世に處する苦惱と憤懣を訴へる。

世溷濁して分たず、好んで美を蔽ふて嫉妬す

後段（第九小段以降）になると、一轉して、天地上下を遍歴して女神を求め求婚する。しかし望みは達せられず、ついに仙遊至樂の境地から再転し、汚濁の世の現実に戻り死をもって祖國に殉ずるを決意する

已んぬる哉國に人無く、我を知ること莫し。又、何ぞ故都を懐はん。既に、與に美政を爲すに足る莫し。

二　九歌・・・神々との饗宴の歌
東皇太一（祭の初めに當つて神を迎へる迎神曲）

雲中君（雨をもたらす雲の神の名）
湘夫人（湘水といふ川の神。祭る人間の熱い思慕の情に對して、無情にも答へてくれない。思慕と裏切、期待と落膽が渦卷く。）

帝子北渚に降る。日、眇眇として予を愁へしむ。嫋嫋たる秋風、洞庭波だちて木葉下る

大司命（北斗七星の中の星の神）
少司命（北斗七星の中の星の神。神靈への思慕とそれを受け入れてもらへない憂ひ。）
東君（太陽神）
河伯（黄河の神）
山鬼（山の神）
國殤（戰ひで死んだ戰士の魂をうたふ歌）

身既に死するも神以て靈、魂魄毅として鬼の雄とならん

禮魂（祭りが終つて神を見送る送神曲）

三、天問・・・天に對する問ひ掛け

女に采薇を警めらる。鹿何ぞ祐くる。

四、九章・・・離騷を發展させたもの
惜誦（懐王を哀惜して辭を誦する）

吾れ君を先にし身を後にするを誼と。羌（あぁ）、衆人の仇とする所なり。專ら君を惟（おも）うて他無し。又衆兆の讎とする所なり。

涉江（まさに郢都を去るに當つての心情や感慨を、まだ記憶の新しいうちに述べてゐる）

哀郢（多年の放浪を經ていよいよつのる望郷の念）
抽志（望郷の念は溢れてゐるが、まだ精神上のゆとりのある時期時期の作品）
懷沙（死を恐れず、世の君子の手本にならうとする決意を述べる）
思美人（二度目の追放の時の作、まだ自決の思ひには至らず）
惜往日（最後の言葉を遺し、自分の死が君王の心を動かすことに望みをかけた）
橘頌（讒言による挫折を知る前の、純粋な理想像を橘に託して歌ひ上げる）
悲回風（節を守って死んだ先人たちを思ひ浮べ、そのすぐれた業績を慕ふ）

五、遠遊・・・離騒を發展させたもの

時俗の迫阨を悲しみ、輕擧して遠遊せんと願へども、質菲薄にして因る無く、焉にか託乘して上浮せん。

六、卜居（屈原と太卜との問答）

屈原既に放たれ、三年復た見ゆるを得ず、知を竭し忠を盡し、而も讒に蔽障せらる。心煩ひ慮亂れ從ふ所を知らず。

君の心を用ひ、君の意を行へ。龜策も誠に事を知る能はずと。

七、漁父（屈原と漁夫との問答）

屈原曰く、世を擧げて皆濁りて、我獨り澄めり。衆人皆醉ひて、我獨り醒めたり。是を以て放たる、と。

○『詩經』と『楚辭』
『詩經』・・・樂しみて淫せず、哀しみて傷（やぶ）らず（『論語』）
『楚辭』・・・喜びも悲しみも激しく歌ひあげる

○聖賢遺言講義
○離騒の一悲曲